

守山さんの受難

【登場人物】

守山奈緒

佐野あゆみ

佐野楓

遠山明

冴島とよ子

旅行者男女

○サイゼリヤ福島駅東口店（夕方）

守山奈緒、カプチーノを飲みながらぼんやり雑誌を眺めている。

隣のテーブルには横並びで座っている親子・佐野楓とあゆみ。

息を切らせて店に入って来た遠山明、2人の席めざして歩いてくる。

明「すみません、遅れてしまって」

楓「いーえ！全然大丈夫ですよお。こちらこそお忙しいところごめんなさいねえ。お仕事？」

明「ええ。ちょっと友人と会社、というかNPO法人立ち上げまして。色々なところに挨拶行っていたらこんな時間に。すみません」

楓「せんせ、娘のあゆみです。ほら、ご挨拶して」

あゆみ「はじめまして」

明「はじめまして。これからよろしくね」

楓「ほんと、よろしくお願ひしますねー。親子共々お世話になっちゃうわね、ウフフフ」

明「いえいえそんな。ハハハ」

あゆみ、いらいらと楓の顔を見る。

楓「じゃあ早速始めましょ」

明「はい」

楓「一緒に本屋行く時間なかったからアマゾンでこれ、取り寄せたんだけど」

楓、手元に置いていた参考書を明に手渡す。

楓「どうかしら」

明、ばらばらと捲る。

奈緒、雑誌を置いて腕時計を見る。少し考えて、卓上の店員呼び出しボタンを押す。

店員、端末を手に、すぐやってくる。

店員「お待たせ致しました」

奈緒「すみません、デカンタの小さい方のワインください」

店員「赤でしょうか？白でしょうか？」

奈緒「白で」

店員「かしこまりました」

店員、端末を操作して一礼、テーブルを去る。

奈緒、鞆を膝の上に置いてその中を漁る。
大きな鞆からはさまざまな物が次々と出てくる。

楓、目の前を通り過ぎる店員に手を挙げて、
楓「すみませーん」

店員「はい」

楓「注文良いかしら？ドリンクバー1つ追加で」

店員、ポケットから再び端末を出して入力。

店員「かしこまりました。以上でよろしいですか？」

楓「先生、おなかは？」

明「あ。ドリンクバーだけで」

店員、一礼して去って行く。

明「うん。うんうん、良いですね。絵柄も入っていてわかりやすいし」

楓「そお？良かったあー」

明、参考書をテーブルの真ん中に置く。

あゆみ、それを手に取りぱらぱら眺める。

楓、立ち上がる。

楓「コーヒーで良いかしら？」

明「あ。すみません」

楓「いいのいいの」

楓、ドリンクバーへ。

あゆみ、参考書から目を離さない。

明「ええと、まず、あゆみちゃん、得意な教科はなにかな」

あゆみ「数学と体育です」

明「じゃあ、苦手な教科は？」

あゆみ「国語と英語」

あゆみ、参考書を閉じてテーブルに置く。

奈緒、鞆の中から探していた物を見つけ出しテーブルの上に。

手のひらより少し大きいくらいのサイズ、小さな着せかえぬりえと、12色入りの色鉛筆。

着せかえぬりえの中では、20年程前に流行った魔法少女もののアニメのヒロインが様々な服を着て笑っている。

すべて同じ笑顔。

店員、デカンタとワイングラスを持ってやってくる。

店員「お待たせ致しました。白ワインデカンタ 250ml です。伝票こちらに失礼します」

奈緒「はーい」

店員、去る。

奈緒、グラスにワインを注ぐ。

テーブルの上に広げた物をひとつずつ鞆に戻していく。

あゆみ「特に苦手なのは古文で、漢文は割と得意です」

明「現代文は？」

あゆみ「どちらでもない」

明「じゃあ、英語はどう？」

あゆみ「中間テストほぼノー勉でやって、ライティングはギリギリ赤点じゃなかった。リスニングは赤点でした」

明「そうかー。まあノー勉だったらしかたないよねえ」

あゆみ「…」

会話が續かない。それでも、明の顔には笑みが張り付いている。

奈緒、ぬりえを塗ったりワインを飲んだりしながら時間をつぶしている。

コーヒーカップを2つ持った楓が戻ってくる。

楓「はい。ブラックでいいのよね？」

明「ええ。ありがとうございます」

楓「あれよね、600点以上だと履歴書に書けるんですけどっけ？」

明「ああTOEIC。そうですね、600点。600取れば道で見かける単語も大体わかる」

楓「えーすごい。その上の基準とかは？」

明「そうですねえ、あとは…」

明「720取れば日本の一流大学はだいたいいけるレベル」

楓「えー！夢みたい！あゆちゃん、先生ね、東大出身なんだって！」

明「いやそんな」

楓「憧れちゃうわよー。だって日本でいちばん頭がいい大学だもの」

明「そんなそんな。でもね、あゆみちゃん。16歳だったらまだ何にでもなれるよ。今から頑張ればどんな大学だって」

楓「そうよお。お医者さんとか学者さんと結婚出来るかもしれないし、総理大臣の奥さんにも」

あゆみ「…やめてよ！」

奈緒、ぬりえの手を止めて隣のテーブルを盗み見る。

あゆみ「私、結婚なんてしない。なんでママは男に頼ることしか考えないの？」

楓「もー…。あゆやだあ。ママびっくりしちゃったー。例え話よ、例えばのお話」

あゆみ「私は自分だけの力で生きていくから」

明「あゆみちゃん。奥さん、じゃなくて、総理大臣になることも出来るよ」

楓「えー！ホント？」

明「さすがにプロ野球選手はもう手遅れだけどね」

楓「野球選手は無理ねー。ウフフフ」

明「ハハハハ」

あゆみ、うつむいている。

奈緒の携帯電話が鳴る。液晶には「有香」の表示。

奈緒「もしもし？…あんたいつ着くのよ。…うん、まあ予定は無いけど…」

楓「でもまさか私も40過ぎてまた勉強することになるなんて思ってたわ。あ！せんせ、この間の小テストね、」

明「ああ、どうでした？かなり頑張りましたよねアレ」

楓「94点も取れたのよー先生のおかげで」

明「すごいですね！楓さんの飲み込みが早いからですよ」

楓「やだあ、先生のおかげよー？」

奈緒「…あ、そう？わかった。くれぐれも運転は気をつけて。ああ、圭吾さんが運転するのね。はいはい、じゃあね」

奈緒、携帯電話を置きグラスにワインを注ぎ足す。その半分くらいを勢い良く飲む。

再びぬりえを始めるが、集中出来ず隣を見る。

楓も一瞬奈緒のテーブルを見る。

楓「せんせ、お酒はどお？ワインで良いかしら？」

明「いやいや大丈夫です。まだ仕事もあるし」

楓「あらそお？じゃああとで、来てくれたら1杯ごちそうしちゃうから。あとで、ね」

明「今日もお店出られるんですか？」

楓「もちろんよお。準備とオープンは若い子に任せてるけどね」

明「ホント、楓さん働き者ですよええ」

楓「やだそんなことないわよー。照れちゃう。ウフフ」

明「そんなことありますよー。僕も見習わなくちゃ。ハハハ」

楓の着信音が鳴り響く。イパネマの娘。

楓「やだあお店からだね。ちょっと電話してくるね」

楓、小走りで入り口の方へ。

沈黙。

あゆみ、明の方を見ようとせずスマホをいじっている。

明はあゆみの顔を見ている。張り付いた笑顔で。

奈緒、グラスのワインを飲み、デカンタの残りを注ぎきる。

明、座っている席を立ち、あゆみの隣に座る。

横目で見ていた奈緒、驚いて二度見する。

あゆみ「え。なに？ちょっと」

明「アハハ」

あゆみ「え。なに。気持ち悪い。なんなんですか？」

明「いや、隣の方が話しやすいと思って」

あゆみ「戻ってください。店員呼びますよ？」

明「あゆちゃんは、お母さんと僕の仲を疑っているの？」

あゆみ「は？そんなのあなたには関係ないでしょ。戻ってよ」

明「お母さんと僕、全然そんなのじゃないから」

あゆみ、椅子ごと身体を離すが壁があるのでこれ以上離れられない。

明「だから、安心してね。僕はもっと、若い人が好きだから」

あゆみ「ほんとにやだ。戻って。戻ってください…」

あゆみ、今にも泣き出しそうな顔。

奈緒、きよろきよろと周りを見回す。

2人の様子は一見、普通に会話をしているだけにも見える。

奈緒、卓上の呼び出しボタンを押す。

明、何事も無かった様子で元いた席に戻る。

あゆみ、立ち上がり、逃げるように店を出て行く。

店員が奈緒のテーブルにやってくる。

店員「お待たせ致しました」

奈緒「あ。あの…」

奈緒、何も言えず店員の顔をぼんやりと見つめる。

店員も、不思議そうに奈緒を見ている。

奈緒「ええと。あの。これ。このデカンタもう1つください」

店員「かしこまりました」

店員、端末を操作し、一礼して去って行く。

奈緒、明をじっと見る。明も奈緒の方を見ている。

○ 飯舘村交流センターふれ愛館・事務室（数日後・昼）

向かい合う、それぞれのデスクに座っている奈緒ととよ子。

とよ子「それで？」

奈緒「え？」

とよ子「それからどうなったの？」

奈緒「ああ。お母さんが戻って来て、2人は普通に世間話してた」

とよ子「はあ？」

奈緒「…いや、世間話じゃないな。自己啓発っていうか、宗教の勧誘みたいな変な話」

とよ子「え。女の子は？」

奈緒「戻ってこなかった。携帯も鞆も置いたままで」

とよ子「お母さん、不審がったりしなかったの？心配とか」

奈緒「あの子は男の人が嫌いだから、ごめんなさいね、って。もう全然だめ。お母さんがその男のこと信じ切ってるから」

とよ子「なにそれ。気の毒にねえ」

奈緒「気の毒どころじゃないですよ…。ああいうのって、どこかに相談した方が良いのかな。でも名前も高校もわからないし。私の考え過ぎかもしれないし…」

とよ子「なんですぐに店員呼ばなかったの？」

奈緒「だって。勘違いかもしれないし、そんなことしたらあの子のことも傷つけるじゃないですか。だから迷っちゃって」

とよ子「なるほど、確かにね」

奈緒「でもやっぱり、私が声を上げるべきだったのかな。今になっても解らなくて…」

とよ子「あんまり気にしない方がいい。守山さんが気にすることじゃないよ」

施設入り口のドアが開く音。若い男女2人組が入ってくる。

廊下からガラス窓越しに

男「すみません、お手洗い借りてもいいですか？」

とよ子「どうぞどうぞー」

男「ありがとうございます」

男「良いつて。行ってきな」

男の後ろにいた女、とよ子に小さく会釈をしてトイレの方向へ。

男、事務室の前に並べてある来客者用のパンフレットなどを手に取る。

男「すみません」

とよ子「なんですか？」

男「そこって、キッチンスタジオみたいなやつですか？」

とよ子「ああ。ええ、そうですね」

男「ふーん」

とよ子「大きなお台所なので、イベントなどそれなりになんでも対応出来ます」

男「へえ、すごい。新しいですよ。ここ」

とよ子「ええ。昨年できたばかりで。そこの台所と和室、あとは、（逆側を指差して）向こうに大きなホール、2階もありますよ」

男「へええ。大きいんですね」

パタパタと廊下を走ってくる音。

女「ごめん、お待たせ」

男「ううん、平気。間に合った？」

女「やだあ。間に合ったに決まってるじゃん」

男「突然きてアレなんですけど、施設の見学とかってさせてもらえるんですか？」

とよ子「ああ。良いですよ」

とよ子、立ち上がって廊下へ出て行く。

男「見学させてくれるって」

女「え？」

3人、キッチンスタジオの方へ。

○ 飯舘村交流センターふれ愛館・駐車場～入り口（同）

奈緒ととよ子、旅行者男女の車を見送っている。

運転席の男と助手席の女が車の中から2人に会釈している。

車、駐車場を出て12号線を南相馬方向へ。

とよ子「あのナンバー、なんて読むんだろう。スモウ？」

奈緒「さがみ、ですよ。相模ナンバー。神奈川の」

とよ子「神奈川かあ」

とよ子「旅行かな」

奈緒「旅行でしょうね。被災地ツアーみたいな」

とよ子「まあ、ああやってトイレ借りに来てくれるだけでもうれしいけどね」

とよ子、身体を返し、事務室の方へ歩き出す。

奈緒もついて行く。

奈緒「ですnee」

とよ子、立ち止まって視線を上。屋根の辺りを見上げる。奈緒もつられて見る。

ツバメの巣。親鳥が巣から飛び立って行く。地面には無数の糞。

奈緒「ビニール傘で糞よけ作った方がいいかなあ…」

とよ子「そういえば、なんで福島行って来たの？」

奈緒「え？」

とよ子「さっきの話」

奈緒「ああ。妹がね、結婚するんですよ」

とよ子「あらまあ。おめでたいわね」

奈緒「ええ。それでいろいろと。2人は市内に住んでるから」

とよ子「なるほどね」

奈緒「でもすごい遅刻して来て」

とよ子「あらら」

奈緒「まあ、私も早く着きすぎちゃったんですけど…」

とよ子「守山さん、いつも早く来るもんね」

奈緒「亡くなった母が時間にうるさい人で。でも妹は、今の彼と一緒にってから」

とよ子「遅刻癖が？」

奈緒「そうなんですよ。しっかりした子だったのに」

とよ子「ふうん」

とよ子、再び歩き出す。奈緒もついて行こうとする。が、すぐに立ち止まる。

とよ子「それってさ、その人にはダメな自分を出せるってことじゃない？妹さんが」

奈緒「え？」

とよ子「いや、だからね、家族の前だからこそ気が張っちゃうことってあるじゃない？」

奈緒「ええ」

とよ子「実家出た方が楽なタイプとか、そういう人っているわよ。私もそっちだし」

奈緒「でも私と妹は長いこと2人だったから。お互いがすごく楽な関係だと思ってたんですけど…」

とよ子「まあ、それぞれ色んな付き合い方があるわよ。家族も他人も。選って来たときに大きく受け入れるのが、守山さんのすべきことじゃないかな。きっと」

車のエンジン音。振り返る2人。

駐車場に先ほどの、旅行者男女の車が再び入ってくる。

とよ子「あれ、スモウナンバー戻って来た。なんでだろう」

とよ子、車の方へ小走りで近付いて行く。

ツバメの巣に親鳥が帰ってくる。

子どもたちがピーピーピーと顔を出して鳴いている。

明が椅子に座っている。

明「英語の力だけではなく、ここで問われるのは日本語力というか。そういった知識も。そしてその知識がアドバンテージに…」「例えばアラビア語ね。これはもうね、文字そのものが読めないからやりたくない、いらいらする、だから勉強したくなくなるんです」

「例えば定年が無い人、定年が無い人ってどんな仕事だと思いますか？そう、自営業ですね。自営業って働く人であり、働かせる人でもある。それはいわばドッグトレーナーのようなもので…」「野球選手は、選手のあとに監督という道があって…」「僕の友人が新しいこんぺいとうのプロデュースをしていて…」

奈緒、遠く、車の更に向こうをぼんやりと見つめている。

(了)